

北海道伊達市有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告6

Overview on Archaeological Excavation of the Usumoshiri site in
Date City, Hokkaido, Vol.6

青野 友哉 AONO Tomoya
永谷 幸人 NAGAYA Yukihito
三谷 智広 MITANI Tomohiro

要 旨

本稿では2025年8月に実施した北海道南西部の有珠モシリ遺跡の発掘調査における、縄文前半期の墓址の調査結果について報告する。遺跡である島の中央部やや西寄りの調査区(3区)では、縄文前半期の破碎貝層と墓址を検出した。これらは2024年9月の調査時に検出したものを引き続き調査したものである。墓址の覆土上部にあたる破碎貝層からはイルカ頭骨3個体分と匙型製品などの骨角器が出土した。貝層の下部にある2024年1号墓(2024GP01)からは散乱した人骨とともにベンケイガイの連結式腕輪40点と南海産の貝製品、骨角器が出土した。

1. 本稿の目的

筆者らは2018年から科学研究費助成事業「狩猟採集文化と農耕文化の接触による社会の変容と地域的多様性に関する学際的研究」【基盤研究(B)代表：青野 JSPS 科研費18H00749】及び2022年度からは「受傷人骨の骨科学分析による縄文終末期の埋葬原理と社会変容の解明」【基盤研究(B)代表：青野 JSPS 科研費22H00741】として有珠モシリ



図1 有珠モシリ遺跡の位置

遺跡の発掘調査を行っている。調査の目的は、かつて札幌医科大学が調査した調査区の設定と平面図及び土層断面図の作成、人骨の年代測定に必要な縄文晩期の貝塚から海域差(ΔR)算出用の分析試料を採取することなどである。また、縄文晩期の多数合葬複葬墓の検出と受傷人骨の出土があり、これらの一次葬墓

の特定につながるデータの収集も目的としている。

本稿では2024年度に一部を調査した2024年1号墓(2024GP01)のうち、未調査であった南半分を2025年8月に調査したため、その成果について報告する。

2. 調査要項

遺 跡 名：有珠モシリ遺跡

登 載 番 号：J-04-61

所 在 地：北海道伊達市有珠町102

調 査 主 体：青野友哉(東北芸術工科大学教授)

発掘担当者：青野友哉(東北芸術工科大学教授)

調査参加者：永谷幸人(伊達市噴火湾文化研究所)、近藤修(東大院理)、三谷智広(パレオ・ラボ)、深澤真楠(新潟大病院)、キャサリン・ハンブソン(東大PD)、ガランス・カシャー(パリ自然史博D1)、堀籠光太郎(芸工大M1)、菅凜歩(4年)、小関優美・鈴木麻帆・池田夕夏(3年)・菅野まみ・武藤由依(2年) 整理作業参加者：堀籠光太郎・菅凜歩・小関優美・鈴木麻帆・池田夕夏・菅野まみ・武藤由依・加々島楓花・伊藤太陽・東海林希・熊谷帆香・吉田佳桜・西山心海・今野葉月・小玉心結・菊地愛葵・近内拓太・佐藤恵

実測・トレース：菅凜歩(図7-46)・菅野まみ(図6、図7-29~45)

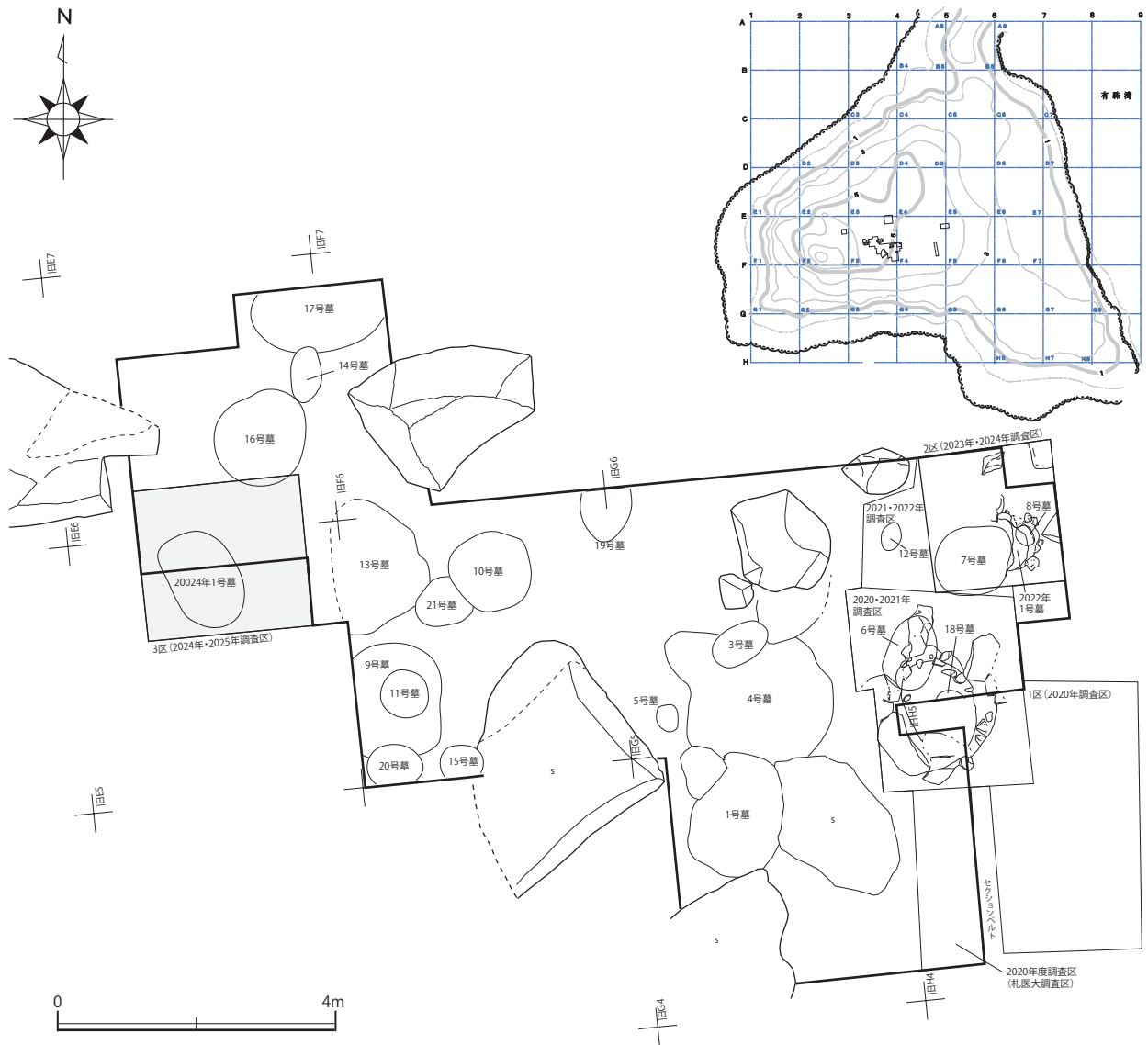


図2 調査区及び遺構配置図(実線太枠：札医大調査区 網掛け部分：2025年度) (右上の遺跡全体図の大グリッドは20m×20m)

調査面積：5.00㎡

調査期間：2025年8月19日(火)～8月26日(火)

出土文化財：土器・石器・骨角器・動物遺存体・人骨

出土数量：コンテナ3箱〔内寸679×367×122mm〕

3. 2024年1号墓の調査

(1) 調査の経緯と経過

2022年度に札医大の旧E-5グリッドの底面を精査した際に下顎骨を含む複数の人骨が散乱して出土した。人骨の下位に墓坑が存在する可能性を考えて、調査区南壁に沿って幅0.3mのサブトレンチを設定して掘り下げたところ、トレ

ンチの西側に遺構の存在を確認し、そこで調査を終えている。

2024年度には上記のサブトレンチを南端とした南北1.0m、東西2.5mの調査区を設定し、調査区南側で検出した楕円形の墓坑の北側半分を底面まで調査した。

墓坑上部には破砕貝層が約20cm堆積しており、本来存在した貝塚が乱されて再堆積したものと判断した。墓坑からはヒトの頸骨や指骨が解剖学的位置関係にない状態で出土しており、複葬行為における一次葬墓である可能性が考えられた。また、未調査区である南側の壁面には大腿骨の一部が見えており、大きな骨も残存していると考え、調査は翌年に持ち越すこととした。墓坑の時期は出土土器から続縄文

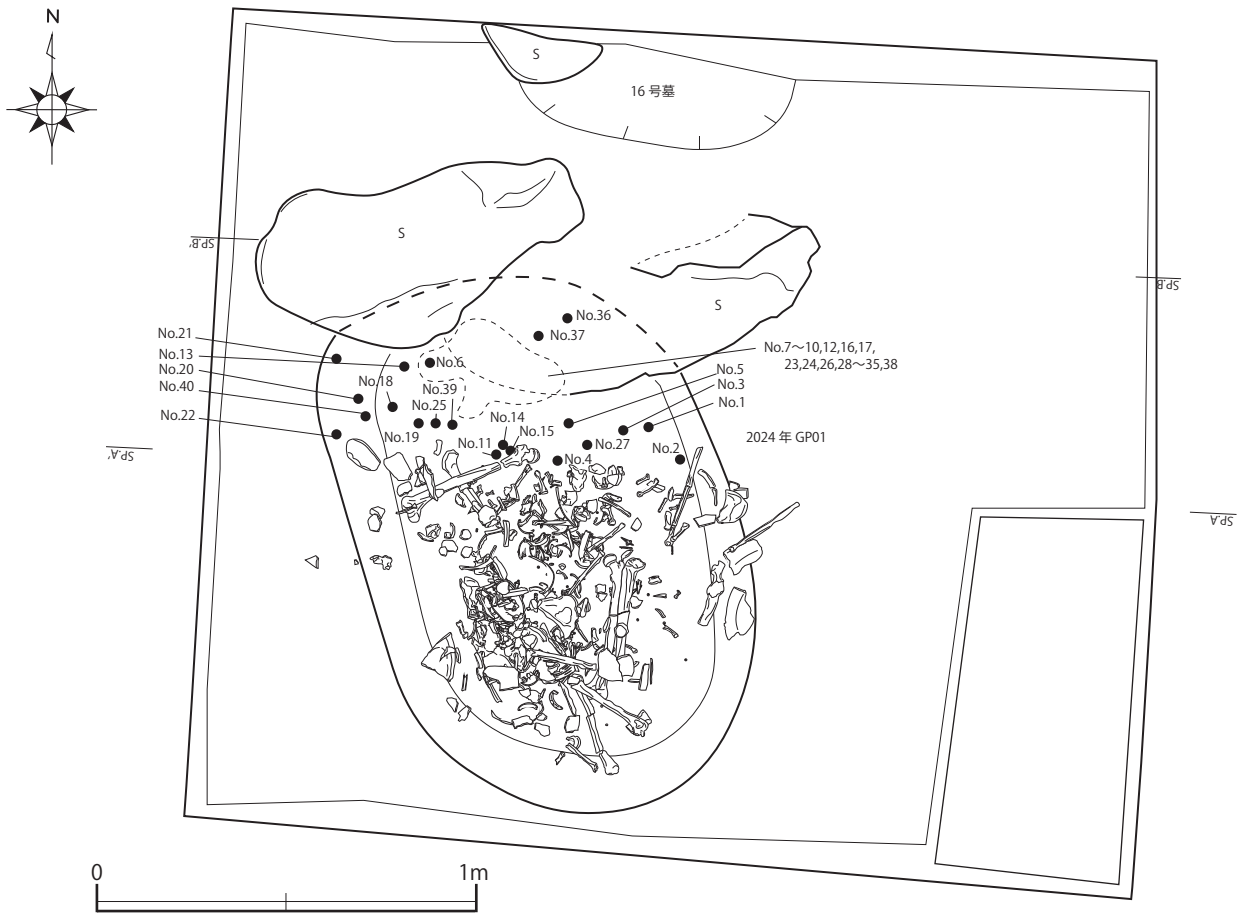


図3 2024年1号墓(2024GP01)の平面図・出土状況図(上面)

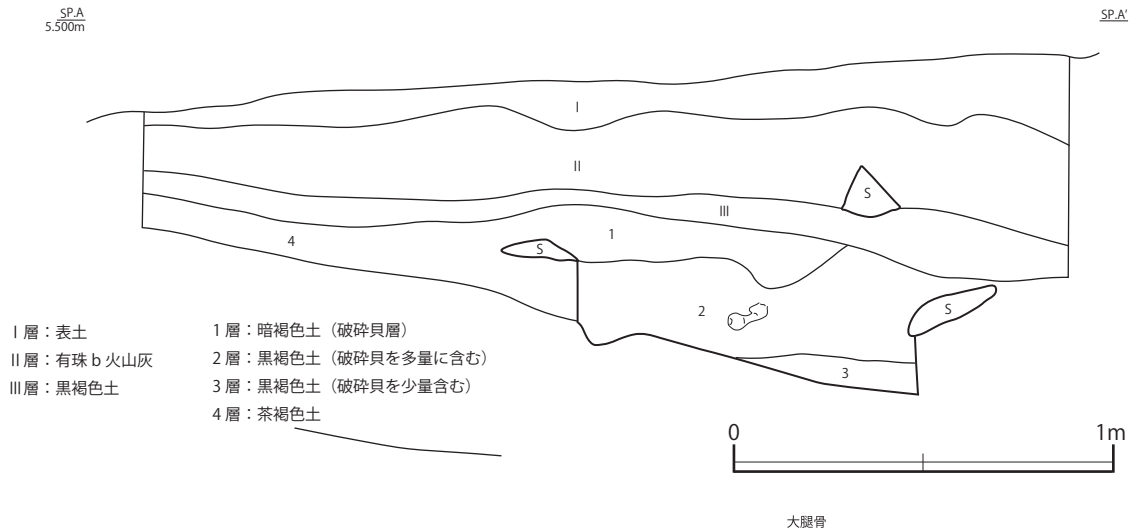


図4 2024年1号墓(2024GP01)の断面図

前半期と言える。

2025年度調査では前年調査区(2.5m × 1.0m)の南側を南北1.0m、東西2.5mの範囲で拡張した。人力で表土を約15cm除去した時点で2024年1号墓の平面形を推定したところ、調

査区東側の南北1.0m、東西0.5mの範囲までは墓坑が及ばないと判断してそれ以外を掘削することとした。以後は2.0m × 1.0mの範囲を対象とし、有珠b火山灰を除去した。有珠b火山灰の直下は拳大から人頭大の安山岩礫が密集し、それら

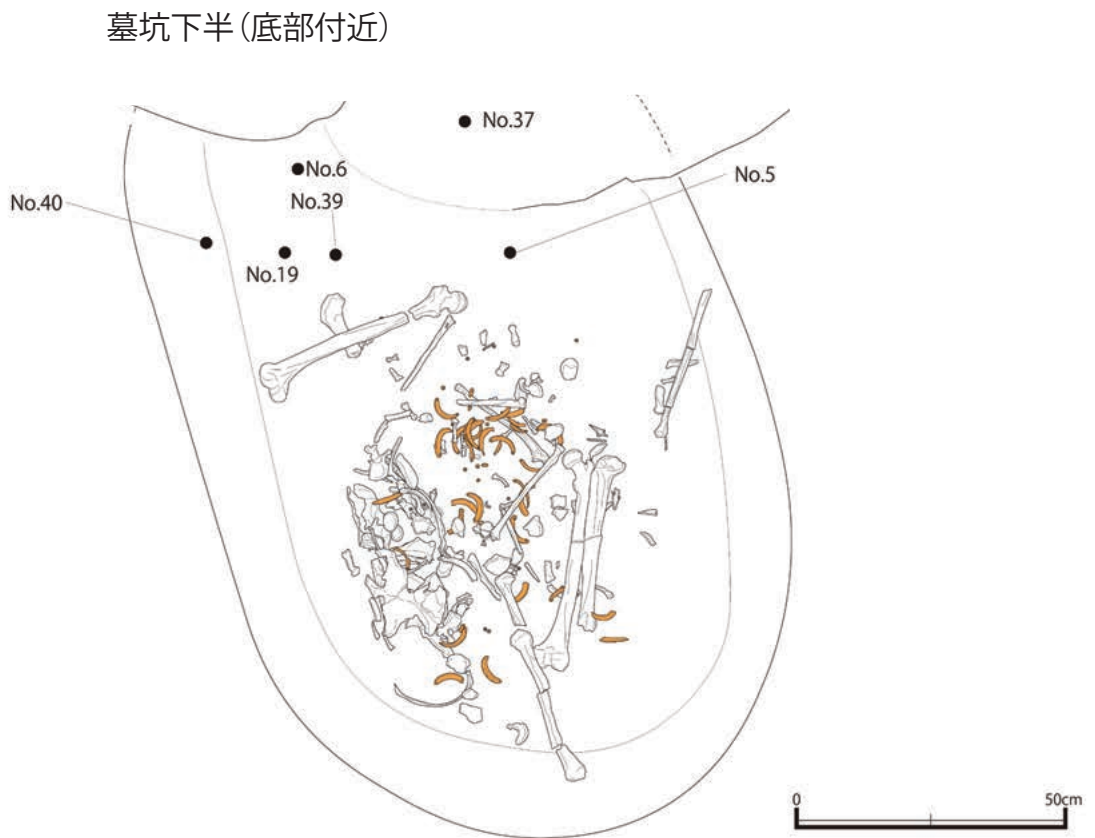
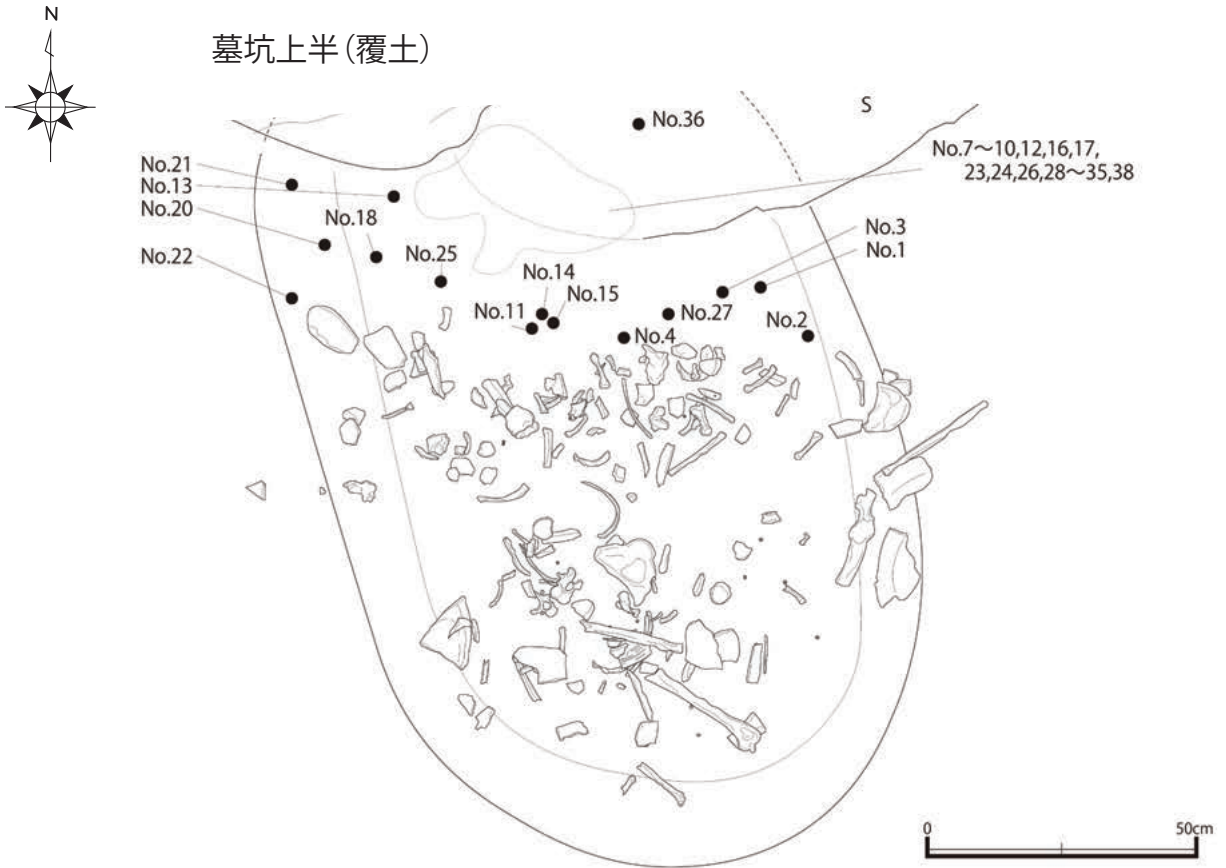


図5 2024年1号墓(GP01)の出土状況図(網掛けはベンケイガイ製腕輪)

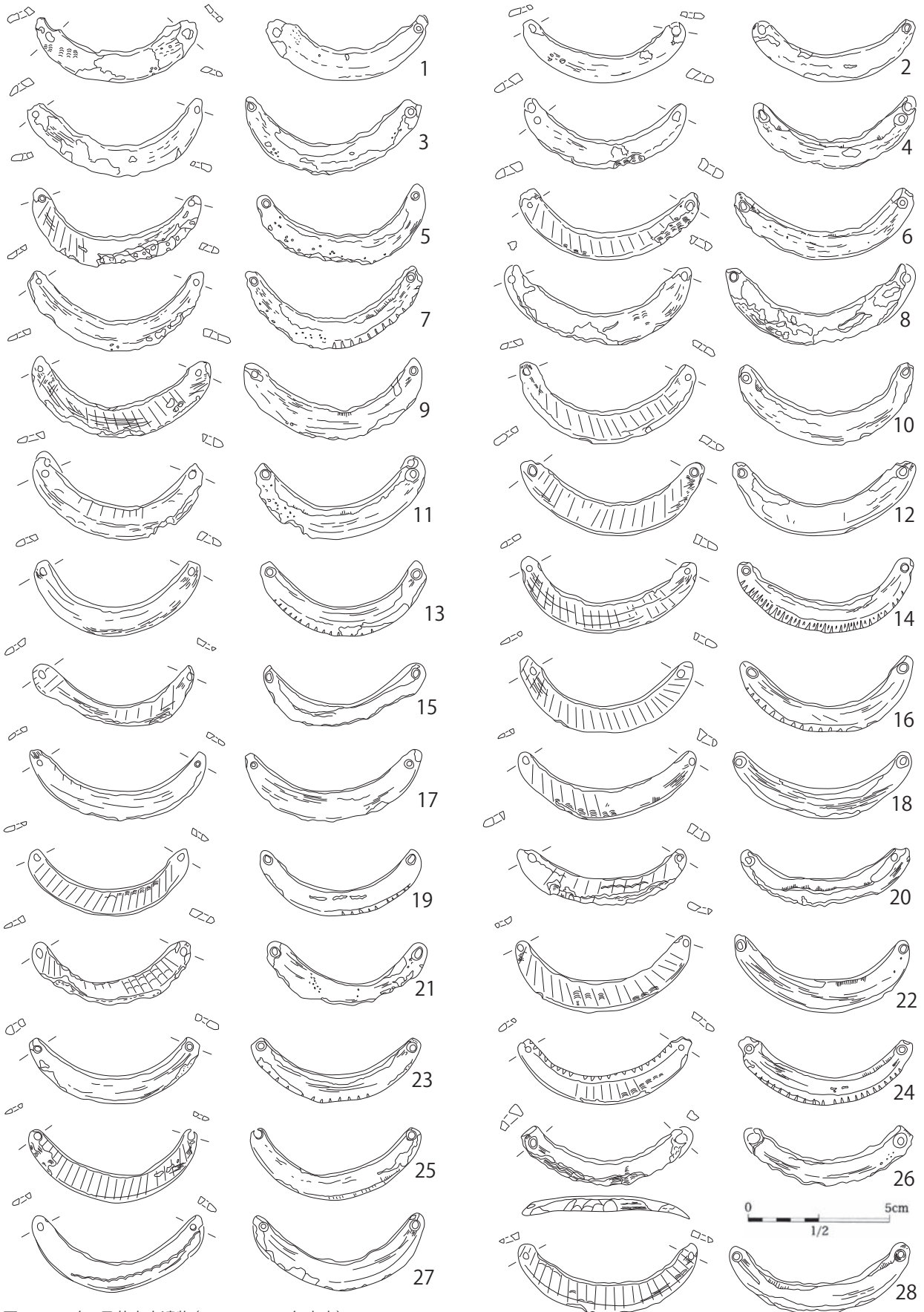


図6 2024年1号墓出土遺物(1~28:2025年出土)

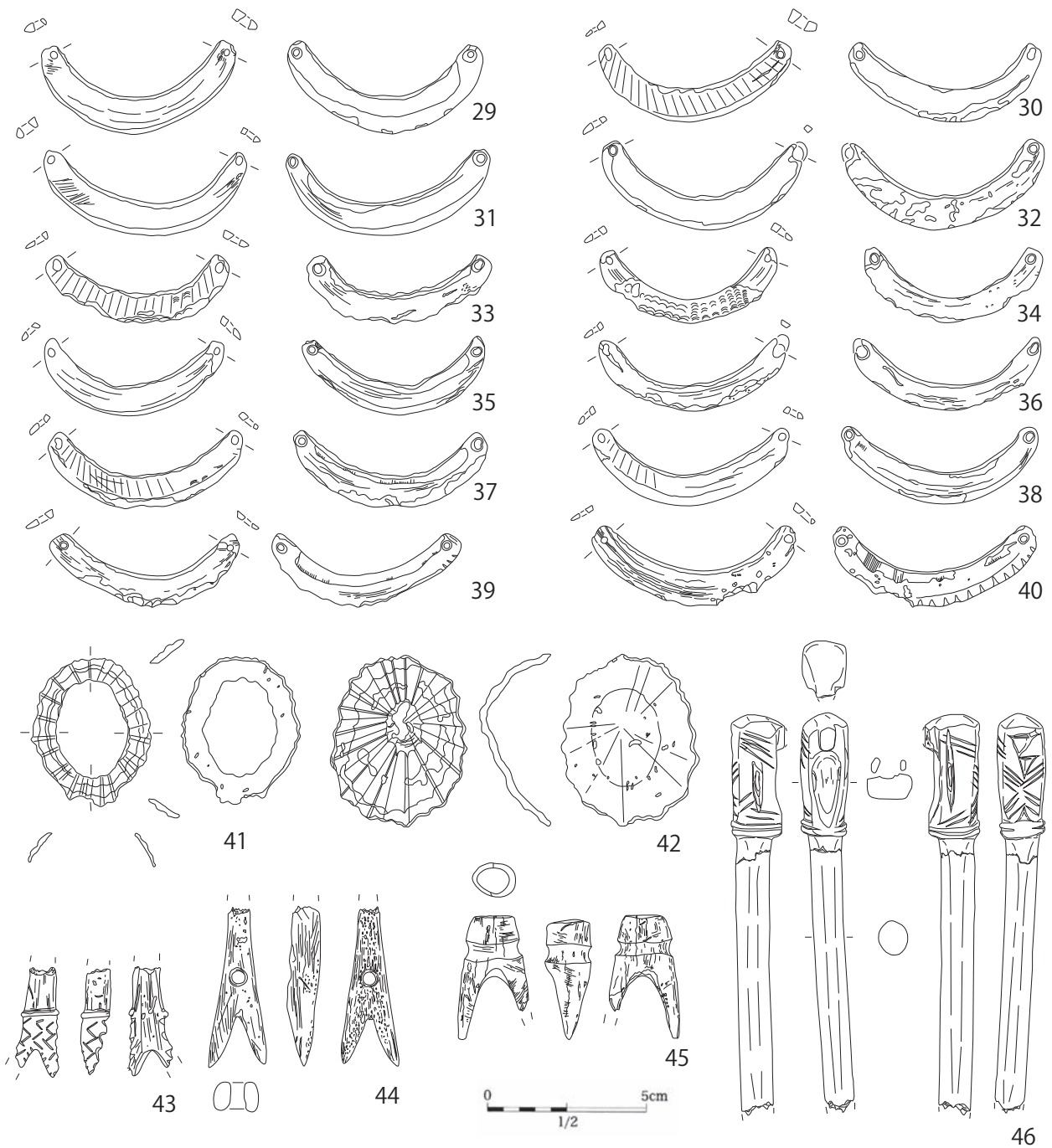


図7 2024年1号墓出土遺物(39・40：2024年出土 29～38・41～46：2025年出土)

を除去すると続縄文前半期の土器片とエゾシカなどの獣骨が破砕貝とともに出土した。

破砕貝層は拡張A(東側の1.0m×1.0m)と拡張B(西側の1.0m×1.0m)に分けて、人工層位の番号を付して回収し、土壌洗浄している。なお、破砕貝層中からはイルカ後頭骨のうち大後頭孔を有する骨3個体分が同一箇所から出土しており、貝層が乱される以前は頭骨の集積があった可能性があ

る。さらにその直下からは肉眼鑑定でイルカの頭骨製と考えている匙型製品が出土しており、儀礼行為の存在が伺える出土状況である。匙型製品は現在、質量分析計を用いた微破壊分析(ZooMS)による材質鑑定を依頼中である。

なお、遺構名は2025年度調査であっても2024年1号墓を用いており、遺物注記は有珠モシリ遺跡2025年調査の2024年1号墓を示す「UM25・24GP01」とした。

(2)墓の構造と出土状況(図3～5)

墓坑の平面形は楕円形で、規模は南北1.46m、東西1.0m、深さは0.2mである。

墓坑上部には破碎貝層があり、連続して墓坑覆土となっている。破碎貝層の最下面から人骨が出土し始めたため、人骨と人工遺物のすべての位置を記録することとした。方法は高所から写真撮影を行い、その場で画像データをノートパソコンに取り込み、画像に番号を付して取り上げた。同時に標高も記録している。

人骨の出土レベルは概ね2024年に作成した土層断面の大腿骨と同じ標高である(図4)。人骨と遺物の取り上げは12回にわたって行い、便宜的に1～7回目を上層、8～12回目を下層として図示すると、上層は人骨・獣骨の小破片が墓坑の範囲を超えて広く分布するのに対し、下層は墓坑中央部に四肢骨など比較的大きな骨が集中している(図5)。人骨がいずれも解剖学的位置関係にないことから、この墓坑は再掘削されて乱されていることがわかる。ただし、下層からはベンケイガイ製連結式腕輪40点(2024年出土の2点を含む)が墓坑中央で橈骨(左右)と尺骨(右)の付近に集中していることから、一次葬墓では腕輪を着装した遺体が埋葬され、その後の掘削により移動したと言える。実測図は獣骨も含んでいるため、今後は人骨のみを対象とした出土位置と方向を分析して本来の埋葬姿勢の復元、あるいは盤状集骨葬の可能性を検討する予定である。また、不足部位の検討から特定部位の抜き取りなど、葬墓祭制の具体に迫りたい。

出土遺物は土器破片とベンケイガイ製腕輪、アミガサガイ製腕輪と未加工品、鹿角製銛、棒状鹿角製品がある。

土器は下層(10回目)から恵山Ⅲ式(青野2011)の大型破片が出土しており、続縄文前半期の墓坑であることは間違いない。ただし、出土土器が初葬の時期と再掘削の時期のいずれを示すかは判然としない。

4. 成果と課題

2025年の発掘調査では、続縄文前半期の複葬に伴う一次葬墓の可能性のある墓址を調査し、葬墓祭制の復元に資する詳細なデータを収集することができた。しかし、調査最終日は大雨となったために墓坑底部の状況(壙底ピットなど)を確認することができなかった。最終的な報告は次年度の調査後に行うこととする。

調査・報告にあたり、下記の機関および個人より指導・助言を得た(敬称略)。大西善幸(個人)、木村国夫(伊達アイヌ協会)、岩田廣美(いぶり噴火湾漁協)、北海道教育庁、伊達市教育委員会

本研究はJSPS科研費23K22013「受傷人骨の骨科学分析による縄文終末期の埋葬原理と社会変容の解明」(基盤研究(B)、代表：青野友哉)及び、23H04837「考古学的方法による先史人類における社会構造の研究」(学術変革領域研究(A)、代表：山田康弘)の助成を受けている。

参考文献

- 青野友哉, 2011.5 :「続縄文文化と弥生文化」, 甲元眞之・寺沢薫編『講座日本の考古学』5 弥生時代(上). 青木書店. pp.522-545
- 青野友哉・永谷幸人, 2021.3 :「有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告」『歴史遺産研究』第15号. 東北芸術工科大学. pp.59-68
- 青野友哉・永谷幸人・三谷智広, 2022.3 :「有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告2」『歴史遺産研究』第16号. 東北芸術工科大学. pp.11-22
- 青野友哉・永谷幸人・三谷智広, 2023.3 :「有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告3」『歴史遺産研究』第17号. 東北芸術工科大学. pp.63-74
- 青野友哉・永谷幸人・三谷智広・中村賢太郎・パレオ・ラボ AMS年代測定グループ, 2024.3 :「有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告4」『歴史遺産研究』第18号. 東北芸術工科大学. pp.49-60
- 青野友哉・永谷幸人・三谷智広, 2025.3 :「有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告5」『歴史遺産研究』第19号. 東北芸術工科大学. pp.51-60
- 大島直行, 2003 :「Ⅲ. 有珠モシリ遺跡の概要」『図録 有珠モシリ遺跡』北海道伊達市教育委員会. pp.35-58



写真1 調査区[3区]Us-b火山灰上面(北から)



写真2 調査区[3区]Us-b火山灰除去後の状況(北から)



写真3 2024GP01上面出土の指掛具(北から)



写真4 2024GP01上面出土の匙型製品(北から)



写真5 2024GP01覆土調査状況(東から)



写真6 2024GP01覆土中位の出土状況(北から)



写真7 2024GP01覆土中位の出土状況(北から)



写真8 調査区[3区]の近景(西から)



写真9 2024GP01下位の出土状況(北から)



写真10 2024GP01下位の出土状況(北から)



写真11 鹿角製銛の出土状況(北から)



写真12 貝製腕輪と尺骨の出土状況(北から)



写真13 2024GP01下位の棒状鹿角製品(北から)



写真14 2024GP01下位の骨角貝製品(北から)



写真15 2024GP01底面付近(北から)



写真16 調査参加者(東北芸工大、パレオ・ラボ)



写真17 2024年GP01出土ベンケイガイ製腕輪



写真18 2024年1号墓出土遺物